

木造建築のこれから スタジオから講座へ

岐阜県立森林文化アカデミー

富田 守泰

新過程となり、「木造建築スタジオ」から「木造建築講座」として名称が変更になりました。

森林文化アカデミーの中で最も川下の分野である「木造建築スタジオ」はスタジオ(仕事場)と命名する如くに、常に実践を主眼に学生の皆さんと考えてきました。

初年度から続く自力建設プロジェクトは、現在もこの講座のメインプロジェクトとして好評です。この講座では、入学後1ヶ月もすれば実際に現場とテーマが与えられ、建物を造るためのコンペが始まります。「まずは実践することから始める」というこの流れは、学生にとっても、そして教える先生側にとっても最初の試練というところでしょうか。学内には10棟もの自力建設の成果物が点在し、それぞれの現場に懸けた当時の学生の思いが手に取るように浮かんできます。

実践するという事は即ち現場に近く、現行の社会制度と切り離しては進まないということです。アカデミーが設立した平成13年(2001年)から木造建築を取り巻く環境は激変してきました。阪神淡路大震災を経て耐震性を主眼に、住宅性能を数値化し、制度として施行された時期でありました。住宅性能の数値化は本誌読者の皆様方にも身近に関連するところで、住宅に使用する木材の性能評価に結びついてきます。昨年度から実施された「ぎふ性能表示材推進制度」にも否応なしに盛り込まれた含水率規定と強度表示規定は、その流れの一貫であることは説明するまでもありません。

これらの木造建築分野における社会の流れを学生は敏感に捉えています。この講座を選択した学生の課題研究テーマ(下記表)を見ると一目瞭然です。常に社会の要求を卒業後の仕事として活用するという常に意識している学校であるからこそでありましょう。

表 現行制度を踏まえた学生の課題研究タイトル(一部)

- 実務に向けた木質軸組構造・許容応力度設計法の構造計算ルールの提案とその効果検証
- 木質構造の駆け込み寺を目指しての活動報告
- 木質構造を生かして岐阜県産スギ材利用を広める -
- 地域密着型工務店の評価と課題
- 性能表示制度を用いた家づくりの見直し -

今までの10年は常に実践し続けた10年です。それは三澤文子名誉教授の類まれな実践力に負うところが多大でした。そしてこれからの「木造建築講座」の目指すところも実践となりましょう。その一端をご紹介します。

三澤さんが退職時に残してくれた贈り物があります。それは木造建築病理学という科目です。既設住宅は飽和状態となり、新築住宅からリフォームに向けた技術の一つとして日本の大学・専修学校で初めての試みとして開講されました。どんな建築物であっても改築、改修は重要なテーマであります。そして地域の工務店が最も得意としてできる分野が木造の改築、改修なのです。

ところが、ここにも性能表示の制度が絡んできます。制度のトレンドをいち早くマスターし、自ら率先して技術、技能として活用していくためのノウハウを教授しています。この科目は授業だけ取得する科目履修としても毎年募集しています。工務店の皆様、会社内の研修を兼ねて受講しては如何でしょうか。

当初にご紹介したように、実際に建物を造ることにより得るものが多いことは、教える先生側にとっても同じことです。自力建設から10年。既に朽ちて、自力で改修をしながら考えることの多さは計り知れないものがあります。身近なアカデミーのデッキの腐朽状態に困惑するとともにそこから得るアイデアは、今後の10年につながるものと確信しています。学生の皆さんと共に考え、次の自力建設でトライしてみましょう。



▲10期を迎えた自力建設 あらかしのだんだん上棟式にて

● 詳しい内容が知りたい方は
TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー まで